

卒業論文の要旨

論文題目	沖縄ツーリズム隆盛の歴史～観光開発から見る観光立県・沖縄の始まり～
氏名	杉山智基
メジャー	日本地域研究(J)
(要旨)	
<p>本論文は、沖縄県が観光立県と呼ばれるまでに成長した理由とその経緯について、戦後における観光開発の歴史の観点から探るものである。</p> <p>第1章では、沖縄県が観光開発に本腰を入れるきっかけとなった、1975～76年の「沖縄国際海洋博覧会」(以下、沖縄海洋博)を中心に、「青い海、青い空」という沖縄イメージを観光に用いる方法が生み出されたプロセスについて検討した。日本本土の高度経済成長と同期しつつ1970年に琉球政府による「長期経済開発計画」が発表され、1972年の本土復帰を経て「第一次沖縄振興開発計画」が出されるが、観光に関しては、1970年の大阪万博を起爆剤として動き出した沖縄海洋博構想が重要な意味をもつ。しかし、他方で沖縄海洋博は地元へ利益の還元があまり行われなかったため、宿泊施設の供給過多や不況を招き、地元にとっては不満が残る結果となったことが明らかとなった。</p> <p>続く第2章では、沖縄海洋博後のリゾート化の動きについて、大手広告代理店の電通によって提示された新たな観光方針のもとで再構築されていった経緯を検証した。1976年に電通が「沖縄県観光振興総合計画に関する報告書—誘客プロモーションを中心に—」と題する報告書を発表し、沖縄観光を、開発からではなく、歴史や文化の再認識をもとに行う方針を提示したことにより、1980年代以降、日本唯一の亜熱帯としての沖縄ブランドを日本中に認識させることとなった。一方、沖縄県では、1982年の「第二次沖縄振興開発計画」で観光産業を発展させる方針を打ち立て、さらに1987年のリゾート法制定を追い風に「沖縄トロピカルリゾート構想」を掲げた。これらの動きが結びつくことにより、観光政策も開発方針もリゾート一色となり、6兆円を超える予算が投入されて、海水浴場やゴルフ場などの複合型リゾートが県内各地に作られたのである。</p> <p>第3章では、バブル経済崩壊後においても沖縄観光が躍進し、観光立県として確立していく過程を追った。1990年代以降、「琉球の風」や「ちゅらさん」を筆頭に沖縄を題材としたドラマが人気を博し、「沖縄ブーム」が起こることで訪問客数の増加に一役買った。さらに、2002年の「沖縄振興計画」では、それまでの国主導ではなく自立型経済を模索するようになり、その過程で観光だけでなく流通力や情報収集力を強化するなど、国際都市としての立ち位置を明確にしていった。</p> <p>これらの検討を通して、沖縄が本土の意思や様々な思惑を背負いながらも、最終的には観光立県として自立する術を探り、リゾートとしての側面、平和学習を行う場としての側面、本土にはない食文化という側面、伝統工芸や伝統芸能などを体験も交えて伝える側面などを培ってきたことが明らかとなった。</p>	
(指導教員の推薦のコメント)	
<p>「観光立県」とされる沖縄が、どのような経緯によって成長を遂げてきたのか、非常に多くの資料にあたって丹念に調べている。また、沖縄県内部の動きに加え、日本全体の経済政策や開発計画の動向、さらに政府や経済界、地元住民など、県内外のさまざまな動きと関連づけて検討しているため、多角的で説得力がある。よって、優秀卒業論文として推薦するものである。</p>	